

保育の体験と思索

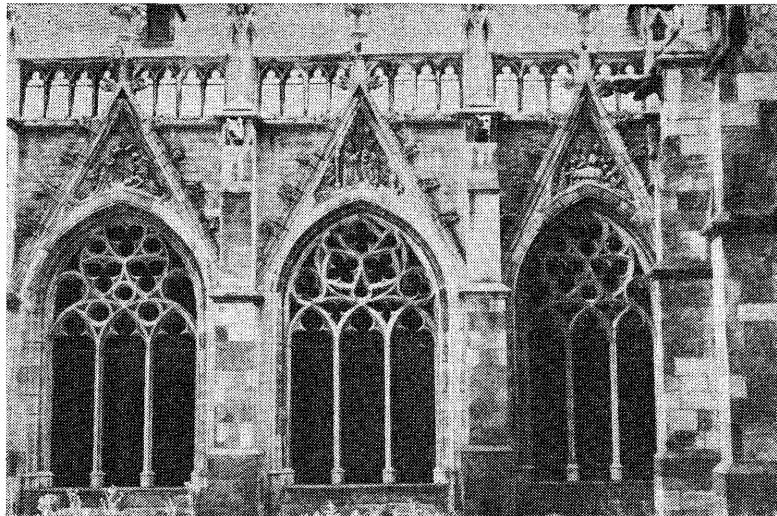
—旅によつて触発されたもの—

津守真

*

「保育の体験と思索」を三ヶ月休むことになつたがその間に、オランダのユトレヒトを訪問する機会を得た。ユトレヒト大学には、「教育学と人間学の研究所」があり現象学的教育によつて知られている。私はいつも旅に出る前はとても億劫なのであるが、思い切つて四面海に囲まれた東海の島を離れると、期待していた以上の思いがけない収穫がある。今回のオランダとスウェーデンの旅は二週間という限られた期間であったが、この旅で気が付かされたことの一端を記したいと思う。

アムステルダムのスキッポール空港におり立つと、むし暑かつた東京の空氣とは違つて、六月半ばなのに秋のような爽やかさである。空港からバスでユトレヒトまで、約一時間足らずの間、緑の草原の間に、赤煉瓦の家並みが所々にあり、教会の尖塔がいく



▲ ドムケルクの石の回廊

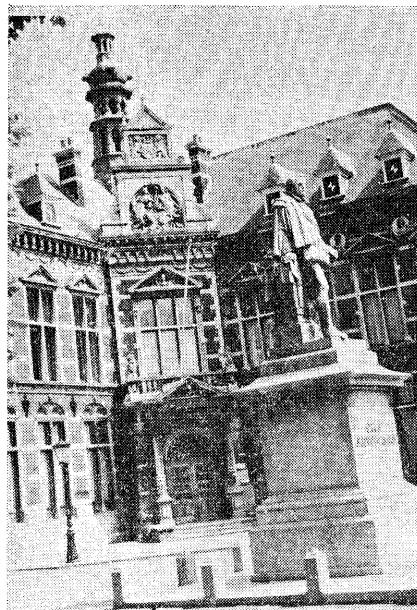
つも見える。迎えに来て下さったフェルメール先生にたずねると、オランダの教会は、カトリックとプロテスタントと半分ずつだという。ユトレヒトの町の中に入ってはじめて店の並んだ通りに出る。一番賑やかな通りは、ウーデグラハートと呼ばれる古い運河に沿っており、その運河に囲まれた地域の中心に、ドムケルクという古い教会がある。この教会の塔は、ゴチック式の尖塔ではなく、もっと古い形式の円筒形の煉瓦造りの巨大な塔で、オランダで昔から一番高い塔と云われ、ユトレヒトの町のどこからでもこれを眺めることができる。ドムケルクを囲んで、古い運河であるウーデグラハートと、新しい運河であるニューウェグラハートが輪状にあり、進路は中心から放射状に外に向って走っている。運河にかかる昔ながらの橋や、古い煉瓦造りの家並の間の石畳の路など、何百年もかわらない風景なのである。私の泊ったホテルも、近代的な大きなホテルではなく、煉瓦造りの四階建ての小さなホテルであった。玄関を入ってすぐにあるリフト（エレベーター）も、内扉のない簡単なもので、上り下りにはギシギシと音がした。

ユトレヒトに滞在中、私はしばしばこの町の中心であるドムケルクを訪れた。現在も使われている教会の礼拝堂について、宗教改革以前からの修道院の回廊がある。ホフと呼ばれる中庭をめ

ぐつてゐる石の回廊は、いまはところ崩れていますが、落着いた瞑想の空間を作っている。その中庭の中心を少し外れてなつめのような木が一本立っているのも昔ながらの風景であろう。私はこの中庭が気に入つて、何度も行つて崩れた石段に腰を下した

が、いつも若い人たちがアイスクリームコーンなどを手にしてたむろしていた。この石の回廊に接して礼拝堂の反対側に、教会の付属館（修道院だったのだろうか）があり、これが現在はユトレヒト大学のアドミニストレーション・ビルディングになつてい

◀ ユトレヒト大学本部

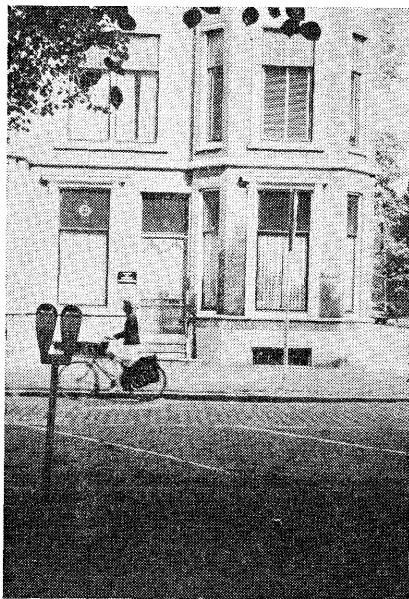


る。大学の会議や集会が今でもここで行われることであるが、階段の装飾手摺、扉の彫刻など、内部も外部も何百年も以前に作られた芸術品である。

ユトレヒト大学は、アメリカの大学のように、また日本の諸大学のように、大学全体が一つのキャンパスに集まっているのではなく、市内の数十ヵ所に煉瓦作りの民家の間に散在している。このドムケルクから石畳の道をいくつか折れ曲つてゆくと、ニューウェググラハトのわきに、「教育学と人間学の研究所」がある。この研究所は、ランゲフエルト、ボイテンダイクというような現象学的教育学を開拓した人々の活躍したところで、いまもなおその後を繼ぐ人々が盛んに研究活動をしている。子どもの研究は理論と実践との両方が必要であるという考え方から、ここではその両方に取り組んでいるのが特色である。私も一人の五歳の男児のセラピーに観察者として参加させてもらい、大変面白かった。攻撃的な子どもとのことであったが、この子どもは入室するや否や、窓のカーテンを全部しめるところから遊びが始まった。後の討論で、他人の目を蔽つて見られないようにすることによって、遊びにとりかかることができるようになるこの子どものことについて、い



▲ 石畳の歩道

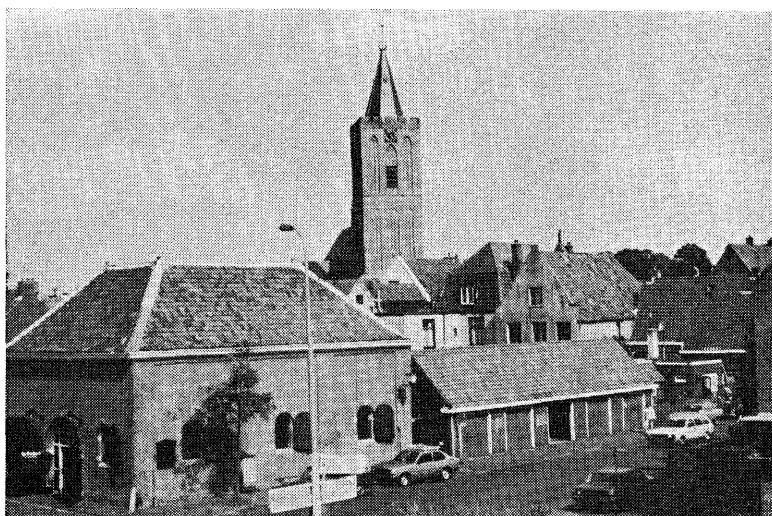


▲ ユトレヒト大学「教育学と人間学の
研究所」

いろいろと面白い議論がなされた。子どもがいきいきと遊ぶことができるようだ。おとなはまず心を開いて子どもにふれることから始まつて、その行動の解釈に当つての考え方など、すぐに共通の地盤に立つことができて私は愉快であった。その後何度かこの研究所のスタッフの人たちと話す機会があつたが、現代の主流をなす実証科学的発達心理学とは異つた哲学に立つて子どもの仕事をしている一群の研究者たちがここにあることに感銘をうけた。もちろん、ここでの心理学者がすべて現象学に立つてゐるのではないか。むしろ、こうした考え方で子どもの研究をしてゐる人々は、力弱い一握りの存在と云えるのかもしれない。しかし、しっかりとした位置づけをもつて、異つた考え方が共存してゐることに、オランダの精神的風土の特色があるのかもしれない。

ユトレヒト大学の「教育学と人間学の研究所」のスタッフの人

たちと、学生の集まる古いレストランの三階で、うなぎのバタ焼を御馳走になりながら、一人の人が、オランダ人が最も嫌うのは制服だと云つたのは象徴的である。何事も一色にきめてしまわないう寛容の精神は、今もオランダに生きているように思われる。



▲ ナアルデンの町と教会 ここにコメニウスの墓がある

私はオランダを訪問することを考え始めた頃から、エラスムスのことが気になり始めた。エラスムスは、十五世紀から十六世紀にかけての宗教改革の時代の神学者であるが、カルヴァンらの急進的改革にはくみせず、寛容と古典的人文主義によって知られた人である。ドムケルクで廃墟になつた修道院の石の回廊を見たとき、また後にナアルデンという古い町を訪れたとき、その中心にある教会は十六世紀の宗教改革のときにカルヴァニストによつて破壊され、昔からの壁画はその後に修復されたものであるのを見たとき、宗教改革とは何であったのかを私は身近に問い合わせた。ユトレヒトの町の煉瓦造りの古い建物の間の、これもまた煉瓦を敷きつめた舗道を歩きながら、エラスムスはオランダの精神的伝統とどういうかかわりがあるのでどうかと幾度か考えた。エラスムスは、当時のカトリック教会の腐敗を批判しながら、急進的な宗教改革の道をとることはできなかつた。彼の眼は生きた人生をみつめており、従つて一面的にではなく多面的に物事を見る眼をもつており、彼の心は異質なものを受け入れる広さを持つていたのであろうと思う。

日本に帰ってきてから、私はホイシンガがエラスムスについて書いたものを見たが、彼の次の文章は、エラスムスの特色をよく表わしているように思う。「彼の信仰が我々の目にあまりに柔弱

で底の浅いものと映るように、彼の神学もまたあまりに不安定であいまいなように見える。彼はすでにスコラ哲学の厳密な論理は捨て去つていた。彼は定義なるものにあまり価値を認めない。「彼にとって他の何ものにもまして大切なのはこの地上の和合である。彼はルターがキリスト教徒の一致を一顧だに值しないものと考えているといつて非難する。神学的論争は彼にはいとわしいものであり、むだなことと思われた。彼は根本的な宗教問題を未解決のままで放置することになつても少しも動する風はなかつた。聖なる真理は厳密一点ばかりの定義には耐えられない。」（ホイシンガ選集4、ルネサンスとリアリズム、河出書房新社、P.15）

エラスムスはオランダのロッテルダムの生れであり、ホイシンガはオランダのライデン大学の歴史学の教授であり、学長である。一九三六年、第二次世界大戦の前夜エラスムス没後四〇〇年のこの記念講演の中で、ホイシンガは、「かつてないほど世界に満ちている虚偽と愚行、粗野と惡意への反発の感情」が多く人の胸の中にこめられているこの時代に、「我々は今もなおエラスムスを必要としているのだ」と云つている。

ホイシンガはまた次のようにも云つてゐる。「オランダ人の生活の主音は依然としてジュネーブの改革者よりもむしろエラスムスによつて奏でられていた。知識と文化への愛好を信仰に結びつけ

ることこそあの偉大なるロッテルダム市民の根本精神だったが、そのような結びつきはすでにエラスムスの没年、すなわちカルヴァンが福音を説く以前からこの国に土着化していたのであった。

イタリア的、フランス的、ドイツ的な性格とは異なる固有な北方形式のヒューマニズムこそ一貫してこの国における文化の培養土であつた。（ホイジンガ 粟原福也訳 レンブラントの世紀 創文社歴史学選書 昭和四十三年、P75）エラスムスはオランダの風土が生んだ典型的オランダ人であつたと云つてもよいのだろう。

ユトレヒト大学の「教育学と人間学の研究所」の所長をしておられたラングフェルト先生は、ユトレヒト郊外のベルトーフェンという緑の美しい町に住まわれ、後進の学者たちに尊敬されながら、今もさかんに学問活動をしておられる。一晩、フェルメール先生と金沢大学の真行寺さんにつれられてお宅を訪ね、夕食を御馳走になって、ゆっくりとお話を伺うことができたのは幸いであった。折にふれて強調されたことに、教育は終点ではなく、始點に興味を持つのだということばがあった。私はその後、このことばを何度も思い返して、次第にそのことばの重みを感じさせられ

れている。「赤ん坊は、最初から人間として生れてくるのではない。だれかが、身を挺して、子どもが人間として成長することの助け手とならなければならない。……」時に話は、ギリシャ、ローマに、ユダヤキリスト教が伝えられてゆくときの言語の問題、また、オランダの歴史などに広がってゆき、一つ質問すると、つくることなく話がつづいてゆく。実際、おとなになつたときの目標を掲げることはやさしい。しかし、そうなつていく以前の、まだ混沌とした最初の状態を理解し、その価値を認め、助け手となつてゆくのには、生きた現象をそのままにとらえるところから出発することが必要なのだ。現代の科学的心理学や教育学は、終点から一面的に見ることが多い。時にラングフェルト氏の現代の人間科学に対する批判は、歯に衣を着せないで鋭い。「ガリレオ、デカルト以来の西欧の機械的科学観は、人間と教育を考えるには適していない。」そのデカルトは、ここから車で三十分もあればゆけるアムステルダムに長く住んでいたのだ。「日本人は西欧のまねをしないように」ラングフェルト氏はこう結ばれた。そして最後に、自作の英文の詩「家族」を朗誦して下さった。オランダの六月は、夜の十時になつてもまだ明るい。四階建の小さなホテルに戻つてもまだ窓からは市の中心にあるドムケルク（教会）の高い塔を見ることができた。

る。そこで子どもに對してどう振舞つたらよいかということの答える、その現象自身の中にある。

私がユトレヒトについて見出したことのひとつは、生きた人間の現象そのものをありのままにとらえることを出発点とする教育が、ここにはしっかりと根を張って存在しているということであつた。子どもの現象をありのままにとらえるということは、行動を客観的に観察することにとどまらない。むしろ、そこにかかるおとなとの主観的体験の中に真実がある。それだから、子どもにかかわるおとなが、心を開いた状態にあることが必要になる。

心を白紙にして、あるいは心の枠をはずして、と云つてもよい。

それは決して完全にならうことはないけれども、それができるようには心を整える努力をすることはできる。そうして、いくらかでも子どもの現象にじかにふれるときに、それまで見えなかつたものが見えてくる。このような観点は、私がこの「体験と思索」のシリーズでとつてゐる観点と共通のものである。このようにして得られた具体的な観察の事実は、それを集積し、科学的分析をして、一般的法則をつくるためのデータとして意味を持つのではない。またその法則に照して解釈することによって意味を持つものでもない。それは、その現象自体で十分に意味を含んだものである。

私がこの「体験と思索」のシリーズにおいてとつている子どもの行動の見方は、まさにこのようなものであり、その点で、ユトレヒトで私が出会った現象学的教育学の人々と共通なものであった。私は自分自身の迂余曲折したさまざまな試みの後にこうした見方をとるに至つたのであるが、はからずも、全く異つた土地で、同じような見方をしている人々を見出したことは驚きであった。一九五〇年代アメリカでは行動主義的発達心理学がまさに隆盛になりつつあったとき——すでにユトレヒトにおいては、現象学的教育学の人々が活躍していたのである。

子どもの見方の基本は一致しており、心を開いて子どもに接するという点では共通していても、子どもにふれるおとなの感性は人によつて異なるし、また、それを考えてゆく仕方は、一人ひとり違つてゐる。そしてまた、子どもにかかわるおとなが、めいめい自分で子どもの行動の意味を発見し、自分自身の見方が開かれて成長してゆくことがたいせつなのであって、思考法も作品も人によつて異つて当たり前なのである。体験と思索の道は多様である。

じたごた書き記したが、要するに、私はこのシリーズをこのま

まの調子で書かうわけようと思ふ。

ナーレンヒトのウーデグラハトのわきの大きな書店で買つてきた英語版の書物に、フィリップスの「ラスマスとその時代——ラスマスの諺集の簡約版」がある。(Margaret Mann Phillips: Erasmus on his times. A shortened version of the Adages of Erasmus. Cambridge Univ. Press, 1967) ラスマスの著述にならひの諺集は、彼が三十年間にわたつて集めた四、一五一のじとわざに、彼独自の注釈をつけたものである。彼の考えによれば、諺というのは古代人の知恵の結晶であり、古代世界への窓である。こりども彼はこれらの膨大な量の諺を体系的に分類することを断念し、「計画的無計画性」をもつて、次々に新しい諺を並べて注をひけひけ。その一五〇八年版の中に、*Festina lente*(make haste slowly) 「ゆっくりと 急げ」というのがある。以下、彼の注釈の要約である。保育のことを考るのにも興味深いので紹介する次第である。

ゆっくりと急げといふのは、矛盾したいとのようである

が、注意深い慎重さをもつて、適時に速やかになせというじとである。この諺は、二人のローマ皇帝の最も愛好する諺であった。一人はオクタヴィウス・アウグストゥス、もう一人はティトウス・ヴァエスピシアヌスである。いずれも優しさと寛容をもつて人々から愛されたが、また、事態が決断をするときには、速やかに処理することに成功した偉大な皇帝であった。オクタヴィウスはこの諺を日常の会話にしばしば用いたし、手紙の中にも引用している。この諺はラテン語の他の語で *matura* という一語でもあらわせる。それは何事も急ぎすぎてはならない。しかもおそそぎず、せかに適した時になせという意味である。これは *festinare* へ似た語であるが、ある区切られた時間点を予期していないという点で異っている。

ティトウス・ヴェスパシアヌスもまたこの諺を愛好した皇帝であるが、彼の鋳造した貨幣には、一面にティトウス・ヴェスパシアヌスの像が刻んであり、他の面には“*festinare*”まわりにいるかがまきついている図が描かれている。いかりは船の動きを緩慢にさせるもので、ゆっくりさせることをあらわす。いるかは最も敏捷な動きをする動物で、スピードをあらわす。だからこのシンボルは、ゆっくりと急げ

といふこの諺をそのままに示すものである。しかりは熟考の時を、いるかは速やかな行為を。このことは更に他の古代人によつても言われてゐる。プラトンは「最初に急ぎすぎる者は決勝点に達するのが遅くなる者である」と云つて

いる。またキンティリアンは、「早熟な知能は成熟に達することがない」と云つてゐる。また昔の人々の云うことには、「時が至る前に賢い子どもは、老年になると愚かになる」ということがある。

(*natura* は英語の *maturatio*—成熟—の語源である。)

*

旅に出ると、いつも自分の中になつて形をなさないでいたものに新たな輪廓が与えられるような気がする。オランダについて、エラスムスについて、それぞれの専門家からは別の見方があるかもしれないが、いつも保育のことに心を潜めていた私にとって、旅によつて触発されたことを記した次第である。 (つづく)

